

小児に抗菌薬や抗ウイルス薬を投与する場合、年齢や体格だけでなく、発達・成長の様子を見極めて投与量を決めることが、副作用を抑えつつ、効果を最大限にするために欠かせません。さらに、重い病気を抱えるお子さんの場合、成長する過程で、体の成長だけでなく、病気の状態、腎臓や肝臓の働き具合なども日々変化します。その変化をきめ細かく把握し、薬が体の中でどう働くか

を考えて最適な投与量を決める必要があり、医学部小児科と共同で研究を進めています。

入院患者さんが、病院で感染症にかからないよう、万一なっても少しでも症状が軽く、早く回復するよう、これからも貢献したいと思います。

次号(2017年8月号)では「医歯薬学総合研究科消化器内科学」を取り上げます。

新興・再興感染症

クリミア・コンゴ出血熱

クリミア・コンゴ出血熱が世界に知られるようになったきっかけは、1944~45年にかけて、中央アジアのクリミア地方で野外作業をしていた旧ソ連軍兵士の間で、出血を伴う、重篤な急性熱性疾患が発生したことです。その後、患者の血液から分離されたウイルス(クリミア出血熱ウイルス)が、1956年にアフリカのコンゴで分離されたウイルス(コンゴウイルス)と同一であることが分かり、クリミア・コンゴ出血熱ウイルスという名前が付けられました。

現在、患者が発生している地域は、アルバニアやブルガリア、ユーゴスラビアなどの東欧、中央アジア、さらにイラクやイラン、サウジアラビア、ドバイ、オマーンなどの中近東、ロシア、パキスタン、中国の新疆ウイグル自治区、そしてアフリカ全域です。

このウイルスはダニが媒介します。人に感染する経路には、①ウイルスに感染したダニに咬まれる、②感染した動物の血液や肉などに触れる、③感染している人の血液や排泄物などに接触する——などがあります。流行地では、羊飼いや農業従事者、獣医師のほか、患者に接する医

東欧や中東、アフリカなどで広く発生 ウイルスを持つダニに咬まれ感染

療関係者や家族などにうつりやすい病気です。

ウイルスに感染した人の約20%が発症するといわれ、2~9日間の潜伏期間ののちに、突然、発熱や頭痛、筋肉痛、腰痛、関節痛、リンパ節の腫れなどの症状が現れます。症状が重くなると、体のいろいろなところで出血をきたします。皮膚では点状の出血から大きな紫色の出血が起こるほか、鼻血や血便が出たりします。症状が現れてから約2週間で15~40%の人が亡くなります。一方、回復する場合は、9~10日で症状が改善します。

ワクチンや予防する薬はありませんので、ダニの活動が活発化する春から秋は、流行地域への渡航は控えましょう。また、流行地域に出かける場合には家畜などの動物に近づかないようにします。屋外に出るときは虫よけスプレーを使用し、帰ってからは衣服や肌にダニが付いていないか確認し、付いていれば除去します。

次号(2017年8月号)では「バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌」を取り上げます。